Interview

小口（こぐち） テル子（こ）さん
（助産師）

1930年　茨城県生まれ

1945年（14歳）　満蒙開拓団に入団
付属看護婦養成所で学ぶ

1949年（19歳）　あそか病院に勤務
市ヶ谷助産女学校入学

1953年（23歳）　結婚

1954年（24歳）　第一子出産　退職

1960年（30歳）　第二子出産

1966年（36歳）　助産師に復職

1972年（42歳）　東京都職員採用試験
（助産師）に合格。都立病院勤務

1991年（60歳）　都立病院定年退職
浅草植村医院に勤務

2011年（81歳）　夫が他界
現在も、浅草植村医院に助産師として勤務

現役の助産師として働く小口テル子さん（82歳）。終戦間際、満蒙開拓団※1（内地）に入り、そこで看護師と助産師の勉強に励む。仕事をもつ母親の大先輩でもあるテル子さんの前向きな姿勢と若々しい感性に、会う人は圧倒されます。これまでも今も、「自分を楽しむ」テル子さんに、あふれるばかりのパワーの秘訣をうかがいました。

満蒙開拓団（内地）への入団。そして終戦

1945年4月、14歳で内地の満蒙開拓団の付属看護婦養成所に入りました。第3期生になります。開拓団の花嫁候補という名目でしたが、満州で役立つよう、看護師と助産師になるための勉強をさせてくれたんです。私は、7人きょうだいの4番目で、上に2人姉がいて、最初は4つ上の姉が入団を希望していました。茨城県の石岡あたりに、満州と同じ施設を作り、午前中は、槍の訓練や山羊の放牧をやってましたね。そこの療養所で、満州から帰国した、凍傷や結核に罹った人やホームシックになった人たちのお世話をしたんです。

終戦後、17歳で看護師の免許をとりました。母が、「産婆は文字通りおばあさんになってもできるのよ」と、助産師になることを勧めてくれた。あそか病院に勤めながら、市ヶ谷助産女学校に通い、19歳で助産師の試験に合格しました。成りたての頃は、症例数を積むために、つらい経験もしました。法律も違うから、今では考えられないこともありましたね。

※1満蒙開拓団…1932年からアジア太平洋戦争終結まで、当時の国策によって中国大陸の旧「満州」、内蒙古、華北に入植した在郷軍人や農民の移民団。

結婚と出産

助産師として妊婦さんに指示すると、「お産もしていないのに、よくそんなことが言えるわね」と言われちゃう。確かに出産の経験をしてみないと、わからないこともたくさんあるので、23歳で結婚し、子どもを2人産みました。私、若い時はもてて、お相手もたくさんいたんですが、実家の隣村に住む、お兄さんのような人と結婚しました。帰省する時いつも一緒になり、当時ビニール会社を経営していた夫は、羽振りもよく見えました。特攻隊にいた時の姿も私はかっこいいと思っていたんですよ。2人とも、神仏を拝んだり、人頼みをせず、自分の力を信用するという価値観が一緒だった。夫は飛行機乗りだったから、頭も良かったの。（笑）

逆境をファイトで乗り越える

1人目のお産の後、夫が結核になり、生活は楽ではなかったです。夫の兄に、助産師として働くよう言われたが、当時は預ける所もなかったし、子どもと一緒にいたかった。

まだ26歳の私は、落ちるところまで落ちたら、後は這い上がるだけだと思っていました。「蜘蛛の糸」※2の話みたいに、どんなに落ちても何とかなると思ったし、ファイトがあった。

ある日、中学生になった息子が、ラジオで「潜在看護師、助産師の方、職場に戻ってきてください」という放送を聞いて、「お母さん、戻りなよ。僕たちが家のこと手伝うから」と言ってくれたんです。その後、助産師に復帰し、4年間経験を積みました。3人の助産師で1カ月100人以上のお産を担当するという目の回る忙しさだった。勤務先が遠いこともあり、その頃、東京都職員の募集があったので、試験を受けてみようと思い、勉強に励みました。大卒程度が条件だったから、法律を勉強したり苦労しましたが、既に実地訓練を積んでいたので、実技の方は有利でした。42歳で合格し、都立病院で働き始めました。

※2「蜘蛛の糸」…地獄に落ちた男（犍陀多）は、生前に蜘蛛を助けたことがあり、それを思い出した釈迦が犍陀多に救いの糸（蜘蛛の糸）を下ろした。ところが、自分だけ助かりたいというエゴイズムから、再び地獄に落ちるという話。芥川龍之介が初めて手掛けた児童文学作品。

最愛の夫との別れ

自宅で3年間介護していた夫が、昨年亡くなりました。自分が治してやろうと思っていたので、亡くなってから毎晩泣いていました。亡くなると、いいことしか思い出さないですね。

仕事で夜遅く帰ってくると、温めてくれたんですよ、ドラマみたいに。喧嘩してもいつのまにか仲良くなっていました。

何の喧嘩もしない夫婦なんて、嘘ですよ。我慢しないで言い合った方がいいです。

きっと夫は、「生まれつき天性の明るさで接してくれてありがとう」と言ってくれると思う。飛行機乗りだった夫と一緒に宇宙旅行しようと思っていたのにね。

都立病院に勤務していた頃

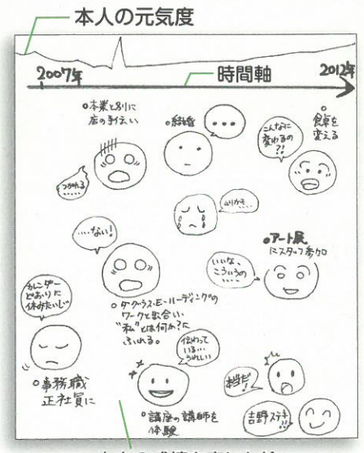
地域のチカラ講座 2012

12月1日（土）
「私の“これから”をみる
～今までの10年から～」
講師：市村　有花里さんの感想

昨年の はばたき21 設立10周年を受けて、自分にとっての10年間を振り返り、これからについて考える講座です。

（講座の流れ）
①自分の年表を作り、今の自分にどのようにつながってきているのかを確認。
②グループで「自分について、作りながら気づいたこと」を話します。

話すことで、何を大事にしてきたのか、自分に強い印象を与えるものは何か、再確認できます。語る側は、聞いてくれる人を信頼して話し、聞く側はプライバシーの尊重と傾聴の気持ちを大事に聞きます。程よい距離感を保って、無理強いはしないように気をつけます。



1人1人の話の中から、いろいろな人生が見えてきました。普通のことなんて何1つなく、誰の人生も、どの時間も違っています。

1人1人の違いを認め合い、かけがえのないものだということを認め合うきっかけにもなりました。

そのように相手を尊重することは、そのようにできる自分自身の尊厳を高めます。このワークを自分自身を生きるきっかけに使っていただけたら幸いです。